

# 「日野川流域の歴史について」

## 【たたら生産と鉄山政策(流砂対策)】

講師

たたら研究会全国委員(鳥取県代表)

かげやま たけし  
影山 猛 さん

江戸期から、「木のあるところにたたらを打ち込む」というのが原則でした。たたらを1年間経営するために必要な山林は約90町歩から100町歩です。5、6年もすると周りには山の木が無くなるので、たたらは7、8年で別の場所に移動していました。

木を切るときに「根切り」をしますが、炭になる樹齢25～30年の広葉樹の場合、根から必ずわき芽が出てきます。「出た芽は切らずに山を再生するんだ。わき芽を絶対にこれは切ってはいけない」という原則も、江戸期何百年を通して守られてきたようです。1年ぐらいで小さな木になっていくのです。だから「山の木を切ったから洪水が起こるんだ」というのは誤りで、江戸期の文書を読んでも「山の木を切ったから水が出たんだ」という記事はありません。広葉樹林が守られてきたことでむしろ洪水は起こらなかったのではないかと考えております。



今から140年ほど前の元治元年に、藩の方で「米子近くの日野川が洪水になるのは、たたらに必要な砂鉄を取った後に廃砂を流すのが原因ではないか。砂鉄を取る“鉄穴”という場所を半分に減らせ」という命令が出て、調査があり、465箇所の流し場の内、115箇所が休業しています。これまでの流した総量を計算してみると、大山の5合目から上の量に匹敵する4億から4億5,000万立方メートルもの山の砂を削っていました。これは中海を3分の1ほど埋めるほどの量です。これが日野川に流れ出て、昔は浜の目といわれた弓浜半島の外浜を形成していったと思います。砂鉄は一升の真砂土から耳かき1杯しか取れないので、廃砂はすごくたくさんあったわけです。

山口大学の教授が弓浜半島をボーリングしてみましたところ、たたらから流れたと思われる小さな鉄滓(スラグ)が出てきたため、その場所は日野川から流れた水と砂で形成されているということが明らかになりました。現在のように砂の供給がなくなり、たまった砂も流れ出してしまうと、皆生の海岸が侵食され、弓浜半島もやせてしまいます。たたらにはそういう利点もあったと考えてほしいと思います。明治26年に大きな水害がありました。このときたたらも大きな被害を受けておりますが、米子の人々が当時の内務省に「日野郡の鉄穴流しが原因だ。鉄穴流しや砂鉄採取はやめさせてくれ」と陳情に行かれたそうです。これに対してたたらを経営する近藤家は、「砂は、大水が出れば流れてしまう。むしろ浜の目の土地をつくっているのではないか。洪水の原因は白水川や船谷川、そのほか大山から流れる川がごろごろ火山岩を出して地下にたまるからだ。その証拠に米子あたりに行ってみなさい。堤防は全部火山石や火成岩を使っている。日野川の奥から来た石ではないでしょう」と反論されました。これでその後の陳情はやめになってしまったそうです。

以上のように、「山の木を切ったから洪水が起こる」というのは実は誤りで、むしろたたらは保水力で日野川の水を守ったということを理解していただきたいと思います。現在、日野郡で約6割の植林は人工林ではないかと思えます。現在の針葉樹林より昔の広葉樹のほうが山の保水力があったのではないかと思います。